

総合的な学習の時間（中学校）

Integrated Studies (Junior High Schools)

石鍋 浩

ISHINABE Hiroshi

要 約

総合的な学習が始まって約 20 年が経過した。各学校では、それぞれが工夫をし特色ある活動を行っている。しかし、現状を見てみると学校差があるなどの課題が残る。各学校においては、新学習指導要領の趣旨に基づき、さらなる改善を通して、生徒の資質・能力の育成を図ってほしい。

提言する。

1 はじめに

平成 10 年の学習指導要領改訂において、総合的な学習の時間が新設された。身の回りにある様々な問題状況について、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決していく姿が期待されたのである。

この学習指導要領改訂前の平成 8 年、中央教育審議会は「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」の中で、総合的な学習の時間に関わることを次のように述べている。以下に抜粋する。

- ・これからの学校教育は、知識を教え込む教育から、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。
- ・このため、学校は「ゆとり」のある教育環境で「ゆとり」のある教育活動を展開する。
- ・具体的には、横断的・総合的な指導を一層推進するため、新たに総合的な学習の時間を設け、各学校の判断により、国際理解、情報、環境、ボランティア、自然体験などに取り組むことを

この答申の文言から、総合的な学習の時間や各学校に対して大きな期待が寄せられていたことがよくわかる。

当時、私が勤務していた T 教育研究所では、子供たちが様々な課題を自分たちの力で見付け、自ら考え、判断し、よりよく解決していくためには、どのような教育をしていくことがよいのか、どのような工夫をすれば子供たちにとって有効か、などということについて様々な協議をしながら研究を進めていた。子供たちが課題についてじっくり考えたり、判断したりするためには、それなりに「ゆとり」のある時間や環境が必要であるとの考えに基づき日々議論をしてきたことを今でもはっきりと覚えている。

当時のマスコミ等は、このような考え方を「ゆとり教育」と呼び、学力の低下を危ぶんだ。しかし、学校週 5 日制の実施による時間減はあったものの、決して学校全体における学習時間が大幅に減じられたわけではなく、教科の枠を超えた横断的・総合的な指導により、それまで課題とされてきた課題発見力、主体的判断力、問題解決力等を子供たちに育成

しようとしたことは、忘れてはならないであろう。

2 総合的な学習の時間の実践と課題

この20年間、各学校においては様々な工夫をしながら総合的な学習の時間を構築してきた。「平成30年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査」の調査結果によると、中学校における総合的な学習の時間の具体的な学習内容は以下のとおりである。

【実施している中学校の割合（複数回答）】

国際理解 36.1% 情報 33.5% 環境 45.3% 福祉 56.3% 健康 26.7% 資源エネルギー 7.2% 安全 24.0% 食 29.8% 科学技術 7.2% 地域の人々の暮らし 55.3% 伝統と文化 70.6% 町づくり 30.3% 地域経済 23.5% 防災 39.1% キャリア 95.3% ものづくり 20.7% 生命 29.8% 社会と政治 12.2% その他 22.0%

各学校では、様々な課題について学習していることがわかる。特に、キャリアに関する学習は95.3%とほとんどの学校で実施している。このことは義務教育修了後の進路選択を含め、将来の自分の生き方を考える重要な時間になっていると言える。

また、自身の学校経営や多くの学校を訪問した経験から、地域や学校、生徒の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習の実践を重視したり、探究的な学習や協働的な学習に力を入れたりしている学校が少なくないことも明らかである。

一例として、私が校長として勤務していたM区立O中学校の実践を紹介する。O中学校は、東京都教育委員会の「オリンピック・パラリンピック教育重点校」に指定されていたので、オリンピック・パラリンピック教育と関連付けながら、総合的な学習の時間をつくりあげていた。

【総合的な学習の時間のテーマ】

第1学年：「福祉」パラリンピック、障害者理解

第2学年：「環境」ESD

第3学年：「国際」日本文化、国際理解

ここでは、第1学年「福祉」の学習を例にあげる。「探ろう！ パラリンピック」を大テーマにし、あるグループでは「足の不自由を自由に変えるために…車いす」のタイトルのもと学習をした。生徒たちは、車いすテニス、車いすバスケットに使用されている車いすについて調べ、それぞれの車いすの構造を知ることができた。さらには、このような工夫のもとに行われているスポーツによって健常者が大きな感動を得ていることに気付くことができた。

「ボランティア活動」のタイトルで学習したグループでは、オリンピック・パラリンピックに関する様々なボランティアについて調べ学習をした結果、ボランティアがなければオリンピック・パラリンピックは成立しないことを理解し、ボランティアを必要としている人たちがたくさんいることを広く伝えていきたいと新たな課題を発見できた。

O中学校の特色として、「総合的な学習の時間の説明会」を4月に開催している。



2, 3年生の代表生徒が各教室に別れ、中学校に入学したばかりの1年生に対して総合的な学習の時間のガイダンスを行う。このことを通して、1年生はO中学校の総合的な学習の時間の趣旨と流れを

理解することができ、2、3年生にとっては趣旨等を再認識できる機会となっている。

また、総合的な学習の時間と各教科等を関連付けた学習も実施している。例えば、数学の時間には、総合的な学習の時間に学んだパラリンピックをきっかけにして、「オリンピック・パラリンピックと数学」と題して、様々な課題にチャレンジした。ゴキブリが人間と同じサイズの場合、100メートルは2.35秒で走れるといった結果を導き出したり、競技人口からオリンピック・パラリンピックのどの種目が出場できる確率が高いかを考えたりし、それをプレゼンテーションした。

社会科においては、「オリンピックから世界を学ぼう!」と題した夏休みの課題を出した。生徒たちは、オリンピックに関する話題等から関心をもった事象を追究し、発表につなげた。リオオリンピックからアマゾンの環境変化に着目し、調べ学習を行った生徒がいた。「破壊されるブラジル・自然が減るブラジル」というタイトルのもと、世界の成長によるアマゾンへの影響や消えゆく生態系について発表した。



ここで紹介した活動に見られる成果もあがっているが、同時に次のような課題も見えてきた。

- ・「探究・創造・発信」を意識した取組を行うことを目指して各学年の成長段階に応じた課題を設定し学習活動に取り組んだ。結果として、

「探究・発信」では個性を発揮し力を伸長させたが、「創造」面では、工夫や創意など、まだ全体的に深まっていないところも見られる。

- ・学年の内容に応じてベース学習、テーマ学習、キャリア学習等を設定し学習活動を進めたがやり繰り返しの難しさや学習を深めるために学習時間が不足している状況がある。

これらの課題解決を目指し、次年度の取組を次のように考えている。

- ・各学年のテーマに合わせた学習活動をより深めることができるように、放課後の活動や生徒の主体的な活動が十分に行うことができるように、学習機材の貸し出し、休業中の活動などを実践する。
- ・個人の研究を発表する機会を十分に確保するように計画を作成することによって、学年や他学年の優秀な作品発表を聞いたり、学年掲示に触れる機会を日頃から設けたりして、学習活動を深められるように工夫する。

平成29年告示の中学校学習指導要領（以下、「新学習指導要領」とする。）解説「総合的な学習の時間編」の「総合的な学習の時間改訂の趣旨」の項目の中に、「課題」に関する記述がある。

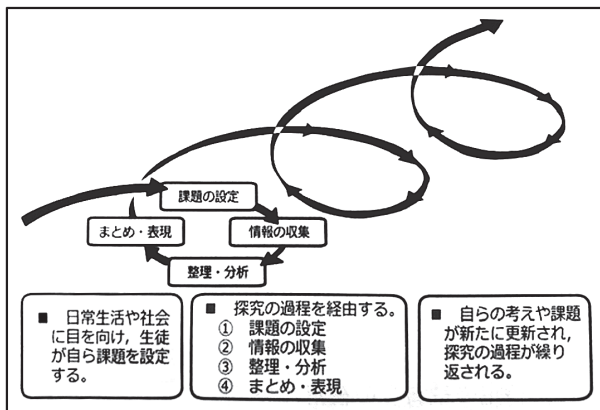
- ・総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにすることについては学校により差がある。これまで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすることが求められている。
- ・探究のプロセスの中でも「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が十分ではないという課題がある。探究のプロセスを通じた一人一人

の資質・能力の向上をより一層意識することが求められる。

3 今後への期待

新学習指導要領「総合的な学習の時間の改訂の趣旨」では、探究的な学習実現のためのプロセスについて記述している。

探究的な学習における生徒の学習の姿



・探究的な学習を実現するため、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探究のプロセスを明示し、学習活動を発展的に繰り返していくことを重視してきた。全国学力・学習状況調査の分析等において、総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる生徒ほど各教科の正答率が高い傾向にあること、探究的な学習活動に

取り組んでいる児童生徒の割合が増えていることなどが明らかになっている。また、総合的な学習の時間の役割は OECD が実施する生徒の学習到達度調査（PISA）における好成績につながったことのみならず、学習の姿勢の改善に大きく貢献するものとして OECD をはじめ国際的に高く評価されている。

今後は、成果を上げている探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとするのが大切であり、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成することが重要となってくる。

各学校においては、前述した O 中学校の実践も一つであるが、先進的かつ効果的な実践を行っている他校の事例などを収集し、それぞれの学校の実態に合わせた総合的な学習の時間を構築していったほしい。

4 結 び

本学の教職課程を履修している学生たちには、将来、教科の指導力を身に付けることはもちろんであるが、学校教育全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行える教員になってほしいと願う。